



怪談藻綴  
一

13  
1459  
1







捕が靈の活

鏡の宿安太の活

曰之卷

明家の怪矢の活

池の吳子成生の活

人の息吳形子見ある活

五之卷

態の子成生の活

瓶僧と成子の活

怪談藻垣草卷之一

矢部が吳神子崇の活

昔長けいちゆうの以田國こらうのある侯家こうは仕子しこ矢部清兵衛やべひさべゑと  
するを士しあり天性てんせい廉れん直ちゆうよして忠勤ちゆうきんをとむげを  
お下民かみんと驚おどるにさる國主こくぬしの露つゆを大方おほほうさるべ  
直牙ちゆうが胡日こにちのむしをがさくとくまりたるを月つき酌しやくする  
るうんととまてさるども浮うきき是これ城しろをめぐめ内うち心こころ  
不ふ太たの侍さむらい木清兵衛きよへいが立たて牙がと神かみと且かつ彼かが直ちゆうふ  
て已おのれが能ひるの行いきとさる城しろ憤いきんを一回いちごうより合せ

清兵清兵悪さま小港一々を主君何の礼明  
もまぐちて切振作付らるるを主君の罪は死  
たりさば矢經清兵清兵といふは主君東國よ  
里分家ありいと死又君より附ぞくあり  
考るははい名と東國の又君おつぎたまはんと  
て使者とつらうたまふおよ使者いまだあつざ  
お先み清兵清兵が又麻上下は悪くも小強く  
東國よいころ本家の主君お上りつりて中け  
ふは西國よあつて右勅とそいひとまら傍

軍の考ども中令已お橙柄とつて家なきは  
もころんた先居は後いいと主君是此の由は  
しもまぐち一昨日切振作付られいひさ居は事を  
訴んた先をまぐち何ん仕んと礼容を語常お  
驚らばのべらおあぞ取次之士大さよおとらさ  
あやしと死した家考のふんぞ救百里は後と  
あよさたるまとの有べき中と清兵清兵と止んと  
さるおをや其の分とつりまひつり初ては國お  
ハ矢船が死せるおより清兵清兵が又上るく悪の





晴  
初  
也  
草  
卷  
一

五

和霊大明神といひたまるるを越え矢部が娘も  
さんせーや其老より死買へ出さざとも風  
程もやまざりしやどよ家士源義光あつて清兵  
清が老母家子の死せる日より行方知れざり  
とさういひやどよる樫山よまよし残さず  
彼が娘のさよとあまもやあつんと吉見源義と  
候として彼よまよきたりける樫山といひる  
麓より山上まで十二里あつて高山海と聳  
松栢丸くとして人泣たえける買ふより若ん

彼山のおもとおゆりて矢部老母のまと残  
さくお樫山ともやあつたつそや老女一人来  
つても山のり残さともいひ山の霊さんよ  
古より女人禁制のともさうよしていつが強  
の男よりとも只一人ゆるさああるうと堅  
く止免へども老女是残もあひまひる食を  
して麓の跡よ一七日うたは其後行方と知  
まらば女いさしてあひまはる人折言樫山  
ども奥山よてもあゆのといひた今鬼女のめ



くさりのあへおきてとよる老あくいと清りなれ  
ば極ちまゐそ矢船が老母成べし家被まあ  
ざして再び山越いでいと供の老とふ下跡  
標は精成なく又只一人る榎山まけりり巖岩  
幽谷のいとひまぐを廻りて披しおとども  
敢て目よさくつるものを影りしうふあまを  
あさ疲れてとある岩上の右松よるまぐり  
くまどろろふづくともまぐ清兵衛く  
とほつを夢あまおひびたくと安えしうふ

見目とひくたて向あ残さつと極むと十又あ  
まりもある松の梢は白銀のまとき髪ふり礼  
せる姥産し居り吉見やうて老とつとひうの  
松の下よつとまよあるは矢船清兵衛が老  
母よてへるさや團主よりの清使あるとと大  
喜よ極りしうを老姥よのあし髪ひおち夫  
船が母ありとまよ吉見老母よむくひ清兵衛  
美安室の飛よ死せるまよと老深く清兵衛ま  
しく社をたてお呉大明神と崇えたまふお

よるんど今おいて程恨哉のまゝたつと  
 ありてゆ基ひて去るあづらに本は是哉止か  
 づさよ一作せりりと云なれは老母うちうねづ  
 さ清き清といふ井はつりぬあつ家とくよ  
 是哉知せり君よ若くて毛頭うみま  
 ば只後とせ一解およいさう恨哉報せんとと  
 をあさり去ねう今よりほへ再び怪の  
 あるべうにいよと中上たまくと云なれは吉見  
 たるよ恨ひいける哉告なうん去さう其下ま

くは怪人のうたがふとさるあうん下哉たま  
 らべいとあまううば老母おうまづさたあ  
 家とさる哉中さるべ一竹初何村の竹とや  
 者の女房の竹白の何時よ男の子哉産んま  
 竹某の女を女子とうまん竹系こそ産日よハ  
 死をべいと一國の音あをつぐあをさとくく  
 ちも哉等記しおわりなれは老母の松が枝とさ  
 らくとちの吉見哉ふくさ合よとももの家そ  
 のおりの小川乃さうとくくく版さり

老母あまを擁りて吉見不興へ定後のとき  
は是哉これ食い一いすかべこてたちまちるり乃の乃の  
あく失ありるる吉よ見み是これ哉これ食い一いるる其その味あじ  
ひああままくく味あじ飯いささりり乃の乃の哉これ  
ふふとと乃の乃の入いれれままくく音ね哉これ傳つひ  
やうやうくくみみてて麓ふもとよよくく再またひひ被お飯ひとと食いせ  
んと出でるるみみ只ただ一塊ひとかけの白しろくくと愛いとししたり  
かかてて立た降ふりりてて山やまののありりきき且かつ老お母ぼががややせ  
ししおおももむむととははばばいいよよかかりりととばばるる甚た法ぽう

うんあり人ひと哉これにに方かたへへととせせてて老お母ぼががととあ  
ろろとと安やす合あたたままよよああししももたたぐぐままととししてて老  
母おぼががややとといいととくくままりりままよよりりてて櫻あけささゆ  
もも止やままりり乃の乃の和わ靈れい大だい昭しょう神じん哉これ乃の乃の意いおお  
大明神だいめいじんととああらら免めんそのその地ち乃の氏うぢ神かみととあありりたたま  
りり今いまよよおおひひてて國くに家け主しゅ護ごのの靈れい驗げんあありり崇たか  
乃の乃の大だい皇こうとと海うみ大だい自じ在ざい天てん神じんのの神かみ又またととくく人ひと  
のの知ちかかととあありりよよててははああららああ昭しょう神じんととあありりととお  
をを代しろままささららるる又またととりりたた



怪談新編 草子卷一

十

怪談 卷一  
石碑の怪異 女久兵衛とよまの結

奥及二女まのよとよまのや久兵衛とよまの若  
あり其性貸庭哉はくかあと哉このとに討の  
花本亭種の家を哉あつたて常よたの  
みとせうが其あつりの人とも久兵衛があ  
造りとよくせると志こひ彼哉ねて好とを  
らとこよ山家の風情おのづら其妙なを  
あつたきとねんけ久兵衛年若と家  
業と其子よあつりが一の空地ともとたて

隠居おとつて屋敷でたの先家こつとよまの  
志もくの亭る哉あつめて家庭ようつせ  
うち回おの山よ若おひて幾年種か  
も知せぬ石碑あり久兵衛らと哉えてたれ  
こそ屈竟乃ものさりとやとく人とやとひ  
て彼石碑を庭あようつらな家がある日あ  
とらう先人と産あよ只一人たちこり  
行くともねくかきか女つとつた女よて  
さたりやがとく飛うらん久兵衛と取ておと家

久しく住まひしとありと引く物ち是へへ行  
 とてはせまひりやよくた者の仕まじうと  
 いらはる服とさぬとあり合扇子枝とつて  
 さんぐよおち中へは久き来へ大盤のよをさ  
 めいぶとくさ中つとつあはをびいと家内乃  
 者ども実付て何おとやうんととせ行て是  
 と見ふよ久兵来へ五體とくみて正年枝を  
 うしあひ居るり枝中うく生せてその子  
 細とまひふまうくの梳子とありのまはよ

うらうら城あつるもの人く是と実て大をよ  
 幾ひ久兵来がまの後のまはひより物たぬ  
 さのたぐひが付入てまじまはぬおるりとあ  
 て身懐の中うももとさうりやどよまうこ久  
 兵来もはぬく割奪のまはと枝りか老あ  
 れがゆい友だちよ知ひて其まうよあ一垂  
 るとまうりよ其翌日の夜より家像よあり  
 りごーあまやと見ふうちおくの方よりか  
 みまると乳する女あうつまうぐつ塵の音を

次いでかゝるとんくーが家内かみうちのともー大おほこと  
ぐく清きよみこひとくきた大おほなるーま  
あゝりりいで行違やういかまと終しゆう末まへやまはひらびく  
ともあゝ母かみのあゝて家いへ残のこもあゝもとの  
あゝ返かへさびーたまゝとれたま家内かみうちの男おとこ女め  
つんもらとていおうどとらあまゝ又また家残いへもあ  
あともど先まへのごとくさうりーやどよ家内かみうち  
の老おきなども大おほよあまゝとたか心こころ地ちもあゝま  
でよ其そのおもやのぐくと昭あきーうがやぐと彼か

石いし碑いし残のこまとの地ちまうくー仁にん度どとまゝと  
祿ろくんまゝろよともむひーうが其そのおまゝりー  
て怪あや美みのまゝとも止とどたらまゝ

怪談もー和算卷之ー終





性理大全卷一

十四



